

九州派とは、寺田健一郎先生にとってなんだったのか？

桜井孝身

私たち、いや、私にとっての寺田健一郎先生とは何であったのだろうか。1950年ごろの福岡にあっていまでは考えられないほどの力が、独立、二科といった公団体にはあった。九州でその頂点にあったのが二科九州支部長の伊藤研之先生であった。結核者が持つ色白い顔面、東京の有名私大出身で上海帰りの、上品な先生のおもかげは、いまだに私には深くキザミ込まれているのである。

その福岡の二科の、いわゆる新米であったのが、オチオサム、桜井孝身であり、その前何回か入選していたのが黒木燿治、石橋泰幸、寺田健一郎の諸先生であった。そのことは寺田、黒木という二人の先生は、伊藤先生の直弟子ということでもあった。石橋、桜井は久留米出身であり、オチ先生は佐賀出身であった。その他の者は伊藤先生を尊敬していても師弟関係はなかった。

当時、世界は、それまで石炭産業が栄えていたのが、まさに石油にとってかわられる前夜であり、次の産業が生まれ、交替劇を激しく演じている最中であった。あたかも、美術の中にあつて、その勢力の中心であった前衛二科の中に、その断層は明らかに表われはじめていた。別言すれば九州二科出品者の中にあつてパツグンの人気と指導力があつたのが伊藤先生であつたということである。その間にあつて苦勞したのが黒木燿治先生であつた。黒木燿治先生の同期生、寺田健一郎先生は、幸か不幸か、九州派結成時には福岡市には不在であつた。確か、結核療養所にはいつていたのではないかと、思う。それにしても彼、寺田健一郎先生は東京から美しい嫁さんを連れて我々の前に華麗な姿を現わしたのである。当時、私は、まだ無頼派ではなかつた。なにしろ自分の息子に共和と名前をつけたぐらいだったので、煙草も酒もやめて、いつかは日本も社会主義になるのではないかと考えていたのである。その輪をつなぐ者として福森隆という先生がいる。彼の結婚式には、かの有名な大正炭鉱の青年隊が多く参加し、また九州派も参加し私と大正炭鉱の先生とモメ、谷川雁先生たちから仲介された一幕があり、その夜、私は不覚にも飲みすぎ、現在のフクニチ新聞社の前のドブにはまり、すでに息が切れかかつた時、幸運にも最後のパトカーにひろわれ、サイセイカイ病院にかつぎ込まれ一命を拾つたのである。思えば1月15日の寒い日であつたことだけはいまだにおぼえている。

この福森先生が詩人であり三池、大正とつづくエネルギー革命のドロ沼をわたり歩いた現在にいたる唯一とつてよい男である。この福森先生がなにを、まちがつか、寺田健一郎先生のところへ弟子入りしたのである。この先生は本物の無頼派で朝から酒をのみ、我々と喧嘩するヤサシイ心の持ち主でもあつたのだ。ここで結論をいそいでいえば、我々は尊敬する伊藤研之先生をぶちたおし、新しい我々の運動を起こそうと、二科をやめてしまい、ワケのワから

ない芸術革命劇へと突っ走って行った。こう書けば相当、カッコよいが、現実には薄よごれたドブネズミの集団であったのであろう。その集団の中であって、福森先生を弟子にし、上野英信先生の旧居を手に入れ、伊藤研之先生なきあとの福岡画壇を牛耳っていたのである。はっきりいって、寺田健一郎先生より、すぐれている者は沢山いたが、何故か、博多で一番というと、それは寺田健一郎先生であったのである。

そして今、常に博多一番である寺田健一郎先生に反逆してきた彼自身の絵がある。寺田健一郎先生自身が説明のつかない多くの絵が突き出、逃亡してきたのである。長い友人である私にさえ、その寺田健一郎先生と原色ウズマク因果関係は判らない。本当に判らないのである。もし、寺田健一郎先生の絵が、真に永遠のものであるとすれば、その原因の大半は、この不可解な絵と寺田健一郎先生の不思議な関係であろうと私はひそやかに考えています。それで、もう一度、ゆっくり寺田健一郎先生の絵を見たいのです。